

思考の

隅

景

三重県と聞いて読者は何を連想されようか。津市は、人口約十五万人で、最小の県庁所在都市を、松江や鳥取と争っている。そんな弱小県も、北川・前知事時代には、『三重は燃えている』と、地方自治再活性を全国に先駆けて訴えた。だが名古屋から国道23号線を南下し、四日市を過ぎても、もはや四散する都市は現れない。松坂まで下ってようやく、津を通過してしまったことに気づく初乗りの運転手も多い。今でこそ過疎地域だが、江戸時代には、なかなか高密度の知的活動を誇っていた。その様を实地検証する国際会議が、副題を「グローバルな視点と地域の文化」として、6月12日、津市上浜町の、三重大学三翠ホールで催された。

三重県出身の文化人といえば、内陸の伊賀上野の城下町は、幕府隠密説もある、松尾芭蕉(1644-1694)の生地。伊勢湾岸の松坂には本居宣長(1730-1801)の鈴の屋が、お城の麓に移築されている。数年前、巨大な舟形埴輪が出土したのも、ほど近く。言語学者、谷川士清とも交友のあった宣長はまた、阿闍陀音韻に

「江戸のモノづくり」国際シンポジウムより(上)  
**徳川日本の地域の活力と海外への眼差し**

2688  
 10.2.21  
 2004.7.31

国際日本文化研究センター  
 総合研究大学院大学助教授  
**稲賀繁美**

も興味を示し、自著『字母仮字用格』の正確さを立証するため、オランダ人に五十音を発音させる実験も試みた。江戸時代後期の海外への関心となれば、鈴鹿より少し南の白子【しろこ】が大黒屋光太夫(1751-1828)の本拠地なら、津市の南、三雲町には、北海道の名付け親、松浦武四郎(1818-1888)の生家がある。ロシアのエカテリーナ女帝に謁見して、当時欧州を知る唯一の日本人、大黒屋光太夫は、蘭学者の大槻玄澤が西暦1795年正月を祝った、新元会、通称「おらんだ正月」にも招かれ、市川崑(津 藤堂藩藩士 1760-1847)描く絵図にも臨席して、お得意のキリル文字を披露している。一方、武四郎は北海道から樺太、千島を踏破し、詳細な地図を作成するとともに、アイヌ文化の擁護に努めた。記念館は平成六年に郷里に開館し、この探検家の偉業を広く伝える。

シカゴ大学人類学教室のフレデリック・スターは、1892年のシカゴ万国博覧会の人類博物館にアイヌ人を「出品」する役を請け負って来日した人物だが、武四郎という先駆者の存在を知

って感銘を受け、その略伝を著述している。武四郎にはまた、全国の神社・仏閣から古材の寄進を受け、それを一疊の茶室に集約した、その名も「一疊敷」が知られる。国際キリスト教大学の構内に移築されたこの茶室については、ヘンリー・スミス氏や山口昌男氏(『敗者の精神史』)が、武四郎の特異な蒐集癖に、持ち前の好奇心を同調させて、思い入れたっぷりの文章をものしている。折から北海道立帯広美術館では「武四郎 時代と人々」展がまもなく開催(7.23-8.22)。出品作には、武四郎の死を悼み衆生が集う趣向の、浮世絵最後の奇才、川鍋晚齋による涅槃図も見られる。

[以下次号]

\*なお第5回シンポジウム「文明交流史からみた科学と宗教」は7月11日、京都大学人間・環境学研究所棟地下大講義室B23にて行われた。問い合わせは電話/ファックス075-6753-6718 / E-mail : o51340@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp 第4回講演会では地元参加者の少ないのが残念だった。